





明治三十一年度限り屯田兵ノ召募ヲ廢シ第

七師團ヲ同三十五年度中ニ完成セシムヘキ

議

嚮者明治二十八年兵備擴張ノ基礎ヲ定ムルニ方
リ一國ノ兵力ヲ定ムルニハ國家當時ノ財政ヲ顧
慮セサル可ラサルハ勿論ナリト雖モ又專ラ宇内
各國ノ東洋ニ及ホス勢力特ニ近鄰諸國ノ兵力ヲ
参照セサル可ラサルモノタリ要スルニ國ノ兵力
ハ一定不変ノモノニ非ラスシテ時ノ宜シキニ從
ヒテ之ヲ増減スヘキハ蓋シ勢ノ免ル可ラサルモ
ノナリ征清役以來國際間ニ於ケル帝國ノ位置ハ
全ク一變シ列國ノ我ヲ視ル決シテ戰爭以前ノ舊

大正十一年四月
隈侯爵寄贈

日本ニ非ラスシテ其我ニ備フル所以ノモ、將サ
ニ大ニ嚴テラントス加フルニ此戰役ハ歐洲列國
ノ東洋ニ對スル感情ヲ一変シ彼等ヲシテ將來益
カラ東洋ニ用ヒントスルノ方針ニ移ラシメタル
ヤ明カナリ即チ此戰役ハ實ニ東洋ノ形勢ヲ挑發
シタルノミナラス所謂東洋問題ナルモノ、破裂
ヲ速カニセントスルノ傾向ヲ生シメタリ我國
此時ニ際シ朝鮮半島ニ對スル責任ヲ完ウシ若ク
ハ某國カ清國ニ迫ツテ新ニ領土ヲ得ントスルノ
野心ヲ防遏スヘキカ如キ積極的考察ハ暫ク舍キ
單ニ攻勢防禦主義ヲ取ルモノトスルモ他日東洋
ノ波濤洶湧スルノ秋ニ當リ確實ニ我國利國權ヲ
保護セシカ為メニハ各國現時ノ情勢ニ鑒ミ將來

ノ趨勢ヲ察シ我國ハ臺灣守備ノ兵力ヲ外ニシ平
時ニ於テ少クモ十三師團ヲ設置セサレハ國防上
ノ目的ヲ達スルコト能ハサルヲ言明シ第七師團
ヲ内地師團ト同時ニ完備ス可キコトヲ主張セリ
然ルニ當時賤政ノ許サ、ル所ナリト云フヲ以テ
止ムヲ得ス同道ニ独立諸隊若干ヲ新設シ以テ歩
兵第二十五、二十六、二十七、二十八騎兵砲兵工兵輜
重兵第七聯(大)隊ノ基礎ト為シ他幸賤政ノ稍餘裕
ヲ得ルヲ待チ其完成ヲ期スルコト、為シタリ是
レ明治二十八年兵備擴張當時ノ有様ナリトス
爾來星霜僅カニ三年當時ノ豫言ハ著々實地ニ證
明セラレツ、アルノミナラス歐洲列國ノ東洋ニ
對スル感情ハ豫想ヨリモ更ニ劇甚ト為リ彼等カ

所期ノ兵力ヲ未夕悉ク集注スルコト能ハサルニ
早ク既ニ拙速ノ膠州湾古領ト為リ露國ノ遼東端
據ト為リ尋テ又威海衛ノ交附ヲ見ルニ至レリ佛
國モ亦到底今日ノ儘ニテ黙過セサルヤ必然ニシ
テ列國ノ兵力ヲ東洋ニ集合スルノ度ハ自今一層
ノ速カラ加フ可キハ疑フ可ラサルコトニシテ東
洋危機ノ切迫日一日ヨリモ急ナラントス且ツ支
シ北海道ト一葦水ヲ隔ツル西伯利亞兵備擴張ノ
完成ハ明治三十五年ニアリ其勢力モ亦實ニ恐ル
可キモノタルノミナラス旅順口大連湾借居以來
露國ハ更ニ大ニ此方面ニ經營シ鐵道ヲ建築シテ
東清鐵道ニ連絡セントシ既ニ五千ノ陸兵ヲ屯シ
尚ホ益増加セントスルノ形勢ナリ故ニ西伯利亞

沿海州ノ兵備整頓スルノ日ニハ金州半島ニモ亦
當ヤニ一大勢力ヲ畜フニ至ルヘシ顧ミテ本道ノ
兵略上ニ於ケル價值如何ヲ案スルニ人口ハ年ヲ
逐フテ増加シ拓殖ノ事業月ト共ニ發達シ鐵道ノ
延長ハ商業ノ進歩ニ伴ヒ其殷富其便利固ヨリ昔
時ノ北海道ニ非ラサルナリ之ニ加フルニ日本海
ニ面スルノ地最モ石炭ノ産出ニ富ム蓋シ戰時如
何シテ石炭ヲ供給スヘキヤハ東洋ニ作戰セント
欲スル邦國ノ最モ苦心スル所ナリ而シテ北海
道ハ實ニ其好餌ヲ備ヘ而シテ一旦津輕海峡ヲ敵ニ
制セラルハ片ハ内地師團ヲ以テ之ニ赴援スルコ
ト能ハス後ラニ北門ノ鎖鑰ヲ敵ノ蹂躪ニ任カス
ノ止ムヲ得サルニ至ラントス乃チ茲ニ本議ヲ提

出シ鄰邦ノ兵備完成スルノ年ヲ期シ楛立作戰ニ
堪ユルノ兵カヲ本道ニ置カント欲スル所以ナリ
國費多端財政ノ困難ナルハ固ヨリ承知スル所ナ
リト雖モ列國ハ我國ノ財政困難ナルヲ以テ東洋
ノ危機ヲ緩マヌルモノニ非ラス本議ノ今日ニ起
ル誠ニ止ムヲ得サルニ出ルナリ
抑モ屯田兵ノ制タル北海道ノ人烟稀少ニシテ其
開拓治不カラサル昔時ニ在テハ兵備拓殖ノ両圖
ヲ一舉ニ實施シ得ルヲ以テ其最便法タリシヤ固
ヨリ論ヲ俟タスト雖モ單ニ軍事上ヨリ之ヲ觀シ
ハ其効用固ヨリ充分ナリト云フ可ラス是レ羊兵
半農ノ制度ニ於テ免ル可ラサル數ナレハナリ今
ヤ民業ヲ以テスル同道開拓事業ハ大ニ其歩ヲ進

ノ強ラ官業ヲ待ツノ必要ヲ減スルニ至リシヲ以
テ依然舊套ヲ襲用シ比較的莫大ノ經費ヲ投シテ
屯田兵ノ増殖ヲ計ルハ膏ニ軍事上ニ不經濟ナル
ノミナラス抑モ亦民業ノ發達ヲ壓迫スルノ憂アリ
是ヲ以テ此際屯田兵ノ召募ヲ止メ其經費ヲ常
備兵ノ養成ニ轉用スルハ又時勢ニ適スル政法ナ
リト信セスンハアラス
北海道人口ノ蕃殖ハ逐年増加シ明治二十五年以
降平均毎年五萬餘人ノ増殖ヲ見ルニ至レリ將來
ニ於ケル蕃殖モ亦蓋シ之ニ下ラサル可シ然レ氏
一個師團ノ全徵集負約三千八百名ヲ直ニ同道ヨ
リ徵集スルコト能ハサルハ勿論他師管ニ比シ徵
兵上過重ノ負擔ヲ課スルコトハ同道ノ拓殖ヲ阻

害スルノ患アルヲ以テ適宜ノ比例ヲ以テ徵集人
負ヲ定メ其地ハ内地ヨリ徵集シテ茲ニ移スコト
ト為スヲ要ス乃チ此際歩兵中隊兵卒ノ平時定負
百三十五名中ヨリ十名ヲ減スルコト、為シ全國
四十八聯隊ヨリ生ズルモノヲ合シ尚ホ之ニ現行
獨立歩兵大隊ノ人負ヲ加フルハ歩兵四個聯隊
ヲ編成シテ尚若干ノ過剩アリ之ヲ利用シテ北海
道ノ兵備ヲ充實スルハ現時ノ急務ニ應ズル有益
ノ方法ニシテ又財政ノ膨脹ヲ防カントスルノ一
大手段ナリ

蓋シ歩兵中隊ノ定負ヲ減少スルハ内地防禦ノ
確實ヲ欠クノ虞ナルカ如シト雖モ本案ハ是ニ減
シテ彼ニ増スノ手段ナルト又威海衛撤兵ノ為メ

兵力ノ分割ヲ免レタルトヲ以テ強テ懸念ヲ要セ
ス且ツ此減負ハ戰略單位ノ運動ヲ敏捷ニスル所
以ナルヲ以テ用兵上ノ要求ニ適ハケルモノニ非
ラス

右邊ニ決定アラシコトヲ請フ

明治三十一年七月

陸軍大臣子爵桂 太郎

内閣総理大臣伯爵大隈重信殿

